

# 第一次世界大戦前のアジア・太平洋地域におけるドイツ海軍-東洋巡洋艦隊の平時の活動と役割-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学政治経済研究所 公開日: 2010-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大井, 知範 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/7187">http://hdl.handle.net/10291/7187</a>

# 第一次世界大戦前のアジア・太平洋地域 におけるドイツ海軍

— 東洋巡洋艦隊の平時の活動と役割 —

大 井 知 範

---

## 《論文要旨》

---

19世紀末から第一次世界大戦にかけてのいわゆる「帝国主義」の時代、ドイツ帝国は「世界政策」の名のもと海外への進出を推し進め、アフリカのほか、東アジア・太平洋地域（山東半島膠州湾・南洋群島）を植民地として支配した。とりわけ、膠州湾租借地や南洋保護領は、広大な海洋領域に点在しているという性質上、海軍が重要な役割を果たしていたが、これまでわが国の研究では、ドイツ海軍のこの地域でのプレゼンスの問題は等閑視されていた。それゆえ、本稿では、第一次世界大戦前にアジア・太平洋地域で展開されていた東洋巡洋艦隊の活動やその機能を通常時の活動から浮かび上がらせることを主題とする。特にここでは、1910年から13年の間に行なわれた中国水域、東南アジア水域、太平洋水域での巡回行動を具体的な事例として取り上げ、東洋巡洋艦隊の役割が自国民保護や有事への対応にとどまらなかったことを実証する。こうして、同艦隊は「交流」「情報収集」「ショー・ザ・フラッグ（das Zeigen der Flagge）」といった複数の機能を併せ持ち、アジア・太平洋地域における関与政策や植民地統治を継続するための不可欠の要素であったことがわかる。その一方で、東洋巡洋艦隊の活動を追うなかで、ドイツ側が抱いていた軍事的示威への幻想や過信が浮き彫りとなり、各地の植民地で反乱が多発した一因が、東洋巡洋艦隊の巡回によってもたらされる虚空の安心感のなかにあったことが明らかになる。

キーワード：東洋巡洋艦隊、艦隊交流、巡回任務、情報収集、「ショー・ザ・フラッグ」

---

## はじめに

1897年11月、ドイツの東洋巡洋艦隊（後の東洋巡洋艦隊）所属の軍艦3隻が中国山東半島の膠州湾に来航し、ドイツ人宣教師殺害事件を口実にこの地の占領を図った。こうして上陸部隊によって作り上げられた占領の既成事実は、中国側との交渉に際しての道具として利用され、翌年3月の租借化への道を切り開くことになる。この衝撃的な占領事件は、中国沿岸部での列強の租借地争奪戦を誘発し、その後の東アジア国際政治の展開や日本の針路に大きな影響を与えた<sup>(1)</sup>。それから17年後、サラエボ事件を契機として第一次世界大戦の火蓋が切られた際、日本は「日英同盟の情誼」<sup>(2)</sup>に基づき積極参戦の方針を採るが、このとき日本の大戦参加の口実とされたのが、ドイツの膠州湾要塞と太平洋上に姿を消したドイツ東洋巡洋艦隊の存在であった。イギリスによる参戦要請撤回にもかかわらず、日本は「極東ノ和平ヲ紊乱スヘキ源泉」<sup>(3)</sup>たるドイツ艦隊を追跡するため参戦を強行し、膠州湾攻略と赤道以北の独領南洋群島への進駐が行なわれた。その延長線上にある対華二十一か条要求や南洋群島の実質的な植民地化が、やがてはアメリカを始めとする国際社会との対立の火種となったことから、第一次世界大戦参戦は近代日本の行末にとって重大な分岐点であったと考えることができる。

このように、1890年代から1914年にかけての東アジア・太平洋地域へのドイツの関与、なかんずく東洋巡洋艦隊の駐留は、列強による中国分割や日本と諸外国との関係にさまざまな影響をもたらした。しかしながら、東洋巡洋艦隊の存在や行動は、これまでわが国の学界ではほとんど顧みられることはなく、ドイツ「世界政策」の実働部隊としての漠然としたイメージしか浮かび上がってこない。その一方で、欧米の学界ではドイツ海軍の東アジアへの展開について、これまでに多くの研究が積み重ねられてきた。まず、今日

のドイツ海軍の海外活動との関連性から東洋巡洋艦隊を取り上げたヴァレの論文は、同艦隊の歴史の変遷や艦隊活動に関する基礎知識を提供しており、その全体像を把握するうえで有益な成果をもたらしている<sup>(4)</sup>。19世紀後半のドイツ海軍の東アジアでの活動については、膠州湾占領や東洋巡洋艦隊の編成を軸としてガンツやゴットシャルの研究がある<sup>(5)</sup>。また、中国における砲艦外交や治安維持任務に関しては、エバーシュベッヒャーの実証研究が重要な成果を上げている<sup>(6)</sup>。軍事戦略史の観点からは、膠州湾の青島を母港とし、ここを活動拠点にしていた東洋巡洋艦隊が、有事の際の大規模な通商破壊作戦を策定していたことをオーバーラックの精力的な研究が明らかにしている<sup>(7)</sup>。一方、青島を母港とする東洋巡洋艦隊は、中国や膠州湾租借地の権益保護にとどまらず、その南方に広がる太平洋植民地の治安維持任務も担っていた。こうした植民地での反乱鎮圧や暴力支配における海軍の役割に触れたものとして、ヌーンやクルークの研究が史実の解明に寄与している<sup>(8)</sup>。

しかしながら、これらの先行研究では、植民地の獲得や反乱鎮圧の局面における東洋巡洋艦隊の緊急出動に関心が集中し、平時における活動には十分な考慮が払われてこなかった。つまり、ドイツの東洋巡洋艦隊の活動は、「砲艦政策」(Kanonnenbootpolitik)や「懲罰(討伐)派遣」(Strafexpedition)のみで語りつくせるものではなく、平時においても固有の役割や存在意義があったであろうし、それが外交政策や植民地統治とどのように絡み合っていたかが問われる必要がある。それゆえ本稿では、中国から南洋<sup>(9)</sup>に広がるドイツの広大な植民地帝国を舞台に、東洋巡洋艦隊の活動の様子をドイツ連邦公文書館所蔵の文書<sup>(10)</sup>によって跡付け、さらには、同艦隊が果たしていた機能や役割を見るなかでドイツのアジア・太平洋支配の実相を解き明かしてみたい。とりわけ、アジアと太平洋両地域での同艦隊の活動を一括して論じること、および、艦隊巡回が支配者側のメンタリティに与えた影響に踏み込むことで、本稿は従来の先行研究とは異なる視点に立つ。

本論に入る前に、わが国ではあまり知られていないドイツ東洋巡洋艦隊の歴史の変遷に関して簡単に紹介しておこう。1860-62年のプロイセン艦隊の東アジア遠征（オイレンブルク使節団）を契機にドイツ海軍の東アジアでの軍艦駐留は常態化し、帝国建設後、海軍本部長シュトシュのもとで海軍はビスマルクの外交政策を側面支援する役割を担うことになる。つまり、巡洋艦中心の艦隊整備により、海外の通商を保護することに主眼が置かれ、東アジアに派遣される軍艦は、軍事的示威による砲艦外交や威信の維持、危機に際しての居留民保護の活動に従事した。その後、日清戦争勃発に起因する不透明な国際情勢に対応するため、1894年10月に巡洋艦4隻からなる東洋巡洋分艦隊（Kreuzerdivision）が編成され、これは1897年11月の膠州湾占領直後に本国からの増援部隊と結合して東洋巡洋艦隊（Kreuzergeschwader）へと拡充した。本稿で取り上げる1910-14年のドイツ東洋巡洋艦隊は、装甲巡洋艦シャルンホルスト（11,616t）、グナイゼナウ（同）、軽巡洋艦エムデン（3,664t）、ニュルンベルク（3,469 t）、ライプツィヒ（3,278t）が主力を構成し、水雷艇S90、タークー、大型砲艦イルティス（894 t）、ヤーグアー（同）、ルクス（同）、ティガー（同）、河川航行用砲艦オッター（266t）、チンタオ（223t）、ファーターラント（同）が帰属していた。なお、東洋巡洋艦隊とは別に、南洋群島にはステーション巡航艦（コロモラン1,612t、コンドル同など）が1～3隻配置されるのが常となっていた<sup>(1)</sup>。

## 1. 中国・東南アジア水域における東洋巡洋艦隊

### （1）中国水域での活動

第一次世界大戦前にドイツ東洋巡洋艦隊の存在がクローズアップされるのは、1911年の辛亥革命に際しての行動であろう。その様子については、当

時の海軍専門雑誌『マリーネ・ルンドschau』でうかがい知ることができるが、近年、エバーシュベッヒャーが文書館史料をもとに革命勃発前後の東洋巡洋艦隊の活動を詳細に跡付け、ドイツがこの危機をいかに乗り切ったかを明らかにしている<sup>(42)</sup>。それでは、東洋巡洋艦隊はもっぱら中国への圧力手段や居留民保護などの危機対応のために東アジア水域に駐屯していたのであろうか。ここでは、治安維持や危険地域への出動にとどまらない艦隊の広範な活動を見るために、1911年から12年の東洋巡洋艦隊の活動報告を多角的な視点から分析してみたい。

まず、辛亥革命勃発2ヶ月前（1911年8月）の艦隊司令官クロズィク（Günther v. Krosigk：在任1911年3月－1912年12月）の本国宛報告書の構成を見ると、1）英・米艦隊司令官の青島来訪、2）イギリス国王陛下夫妻の戴冠式、3）揚子江駐留艦としての帝国軍艦イルティス、の3つが主題として掲げられている<sup>(43)</sup>。このように、革命への警戒活動と並んで、現地の列強海軍との交流が進められていた事実が浮かび上がり、対列強という側面でも東洋巡洋艦隊が何らかの役割を果たしていたことがわかる。

6月27日の英シナ艦隊旗艦の青島訪問に関する記述では、訪れたイギリス将兵に対してドイツ側がいかなるもてなしを行なったかが記されている。両者の友好的な交流は4日間におよんだが、クロズィクは、これが単なるうわべだけのものではなく、「志を同じくする」イギリス人のドイツ人に対する本質的な好意に由来するものであったと確信している。ただしその一方で、彼はイギリス側の将校がロイターなど反独系の情報源に基づきドイツに対する誤ったイメージを植えつけられていることを懸念していた。というのも、当時ドイツの外交当局は、東アジアにおけるロイターの反ドイツ的な記事配信に警戒を強めており、諸々の対抗措置が講じられていた<sup>(44)</sup>。それゆえ、クロズィクは、このような将校同士の直接の交流こそ、現地で広まる反独感情を是正する機会と見たのである<sup>(45)</sup>。イギリス海軍に対するクロズィクの評価

はおおむね高く、潜在敵であるはずのイギリスに対して彼がいかに好意を抱いていたかは、2)のイギリス国王戴冠式の日の様子からもうかがい知ることができる。そこでもやはり、現地のイギリス人との親密な関係を表すさまざまなエピソードが好意的コメントとともに紹介されており、海軍将兵の親善交流は、現地での英独の協調関係の基盤を形成するものとして重視されていた<sup>(16)</sup>。

このように、ヨーロッパでは熾烈な軍拡競争によって対立を深めていた英独海軍が、海外では和やかな交流や友好ムードによって包まれていることは奇異に感じるかもしれない。そこには当然、革命前夜の緊張感が高まる状況下で、自国民やその権益の保護という共通の任務を背負った両国軍人間の連帯感があった。しかしながら、直後の第一次世界大戦が象徴するように、一旦ヨーロッパで戦争が勃発すると、海外に駐留している敵国の軍艦は通商を破壊する危険な存在と見なされ、昨日までの和やかな交流が嘘のようにお互いに放火を交えた<sup>(17)</sup>。在外海軍同士の親善関係は、現地の非西洋諸国に対峙するうえでの共同戦線構築には寄与しても、列強同士の戦争の前では砂上の楼閣にすぎなかったといえるかもしれない。

1911年8月の東洋巡洋艦隊司令官報告の後半部分では、中国の揚子江で活動している3隻の砲艦の様子や各艦長からの現地報告がまとめられている。まず、宜昌方面に展開する砲艦イルティスからは、陸上での実見とデータの提示により宜昌西方への道路建設の進捗状況が報告された。さらに、イルティス艦長報告には、中国情勢全般に関する有益な情報が添えられていた。同艦長は南京で元駐独公使の楊晟と会談し、中国南部での革命のうわさが真実であり、その中心地は広東、長沙のほか武昌であると想定し、2ヵ月後の革命勃発の震源地を的確に見抜いていた。10月の事変の第一報に際して、海軍軍令部は、これがここ数年多発した地方の騒乱とは異なり、大規模な革命の始まりであるという判断を即座に下し迅速な対応をとることができたことか

ら、東洋巡洋艦隊の事前の情報収集活動は本国中枢の状況判断に寄与していたといえる<sup>(18)</sup>。

東洋巡洋艦隊司令官報告からは、イルティス以外にも、揚子江下流に展開する砲艦ティガー<sup>(19)</sup>、広東方面の河川を航行中の砲艦チンタオ<sup>(20)</sup>、鄱陽湖の砲艦ルクス<sup>(21)</sup>と、中国各地で活動していた軍艦の活動の様子も読み取れる。その一方で、たとえ危険な兆候が満ちているとはいえ、東洋巡洋艦隊の情報収集範囲が中国水域にとどまらなかったことは、1911年の7月から9月にかけてのシベリア遠征の報告に表れている。主力の巡洋艦の隊列に水雷艇S90とタークーが加わったこの遠征は、樺太南部の大泊、豊原、ロシア領のウラジヴォストーク、ニコライエフスク、日本領になったばかりの元山、ソウル、さらには中国沿岸の芝罘、旅順、山海関などに立ち寄り、各地の軍事、経済状況を視察している。そこでは、極東ロシア海軍に関する現状分析が試みられているほか、今回の遠征が各艦合同の演習や将兵教育の機会を提供したことに司令官は満足の意を表している<sup>(22)</sup>。

すでに述べたとおり、東洋巡洋艦隊司令官は揚子江流域や中国南部の情勢について現地に展開する砲艦艦長から報告を受けていたが、自らそれらの地域に情報収集に向かうこともあった。革命が沈静化しつつあった1912年5月28日から6月12日にかけて、東洋巡洋艦隊司令官クロズィクは、巡洋艦ニュルンベルクに乗艦して揚子江流域を視察した。上海では、前任の米アジア艦隊司令官やドイツ総領事、在住ドイツ人有力者などと会談し、南京ではドイツ領事から現地の実情について報告を受けている。また、漢口では列強の軍艦や駐留兵力の比較とともに、市内の全般的な状況について観察している。以上の現地視察に基づいて、クロズィクは中国の情勢は今のところ平穏を保っているものの、役人の腐敗と民衆の不満が拡大しており、さらには共和政移行後の中国において南北分断の傾向が見られることを報告した。それゆえ彼は、近い将来の混乱に備え、駐留兵力の増強を望んでいる<sup>(23)</sup>。また、



経済的側面へも関心を抱く彼は、揚子江水運の列強間（特に対日）競争でのドイツ企業の敗北がドイツの威信低下を招くとして、何らかの措置を講じる必要性を説いている<sup>(24)</sup>。この最後の部分に見られるように、クロズィクの一連の報告で特徴的なのは、日本に対する強い警戒心の表れである。たとえば、北京の中央政府が日本により買収されているという情報や重慶周辺における日本の進出状況に関心が注がれ、また、日本の揚子江上流への砲艦展開が実現間近であり、日本の海軍省の高官が調査航行にやってくる事実などが詳細に報告されている<sup>(25)</sup>。

このように、東洋巡洋艦隊司令官が収集した情報の源は、配下の砲艦艦長、外交官、経済人、軍人と国籍を問わず多岐に渡り、軍艦の機動性を背景として最新の情報が集められた。また、現地駐在外交官とは別の視角からもたらされるその分析報告は、軍事専門的な問題にとどまらず、現地の政治経済情勢や列強の動向など広い範囲にわたって情報がカバーされていたことから、本国の政策決定者にとって利用価値は大きかったと思われる。

## （2）東南アジア水域での活動

前節で見たように、揚子江流域での頻繁な情報収集活動は、ドイツがこの地域への政治的・経済的関与を強めていたことを意味し、このことは必然的に同地へ強い利害を持つイギリス、および、進出に強い意欲を見せる日本との角逐を招くことにつながる。このように、ドイツの関心は自らの勢力圏たる山東省にとどまらず、中国内陸部へと歩を進めようとした様子がかがえるが、ドイツの視線がさらにそれをも越えていたことは、東洋巡洋艦隊の活動の軌跡から明らかになる。ここでは、1913年初頭の東南アジア巡回を事例にとり、他国の植民地領域での東洋巡洋艦隊の活動の様子とその意義を探ってみたい。

1913年1月3日、東洋巡洋艦隊の主力である装甲巡洋艦シャルンホルス

トとグナイゼナウは、東南アジアをめざして廈門を出港し、8日に最初の目的地であるボルネオ島沖の英領ラブアンに到着した。そこで、艦隊司令官シュペー少将 (Maximilian Graf v. Spee : 在任 1912年12月 - 1914年12月) の一行は現地の総督によって温かく迎えられ、一方で現地駐在イギリス人との交流の合間に、この地域の最新情報の収集に努めた<sup>(26)</sup>。その後、1月14日にバタヴィアに入港したシュペーは、早速オランダ領東インドの陸海軍司令官やバタヴィア総督を訪ね、滞在中、各種の歓迎行事が催された<sup>(27)</sup>。翌週のパソエロエアン (ジャワ島東部) やセレベス島のマカッサル訪問時にも、シュペーは現地のオランダ当局や在住ドイツ人の歓待を受けることになったが、こうした慌しい巡回行脚のなかに、東洋巡洋艦隊の「移動外交使節」としての役割を見出すことができる<sup>(28)</sup>。

もっとも、遠征中の艦隊司令官は、表敬訪問や交流行事への参列にとどまらず、現地で最新情報を収集し、所見を添えて本国に発信する役割も帯びていた。たとえば、セレベス島の調査報告では、開発の進行状況や産業・通商の現状、人口構成などが紹介され、さらには現地のドイツ企業の活動にも注意を怠らない。これら現地で活躍するドイツ人は、今回のような過去最大級の軍艦の来訪によって勇気づけられ、ドイツの威信を現地で高める効果をもたらしたとシュペーは訪問の意義を評価している<sup>(29)</sup>。また、今回の視察の結果、シュペーは、蘭領東インドが抱える本質的問題が防衛面での脆弱性にあることを見抜いていた。そこでは、特に問題となる外敵として日本が挙げられ、オランダ人のなかで広く見られる日本の野心に対する警戒心、および、その対策としての防衛力増強や強力な同盟国を求める声広がっていることを彼は伝えている<sup>(30)</sup>。歴史的に見て、ドイツでは広大な東インド植民地における小国オランダの統治・防衛能力を疑問視する声があり、独蘭の連携や共同防衛を模索する動きがあった<sup>(31)</sup>。それゆえ、蘭領東インドでのドイツの経済的浸透を目の当たりにしたシュペーの脳裏にも、ドイツがこの地へ政治的・

軍事的関与を強めることへの期待感があったものと推測される。なお、シュペーの情勢分析は現地海軍の現状や防衛体制に限定されていたわけではなく、他地域の項と同様、蘭領東インドの全般的状況にまで及んでいた<sup>(32)</sup>。

ところで、この東南アジア訪問に際して、本隊とは別行動をとっていた装甲巡洋艦グナイゼナウの艦長も報告書をシュペー経由で本国に送信していた。1月19日から21日にかけてスマトラ島南部のテルクベトンを訪問したグナイゼナウ艦長ブリュニクハウス一行は、ドイツ人のプランテーション経営者の歓迎を受け、その後内陸視察を敢行している。視察の後、彼らはジャワ島中部のサマランに立ち寄り、現地のドイツ人たちと交流した後、1月24日から2月1日にかけてバタヴィアを訪問した<sup>(33)</sup>。約1週間の滞在中、現地駐在のドイツ人やオランダ人を交えて、多くの歓迎・交流行事が開催されたが、なかでも皇帝誕生日の祝賀行事は盛大なものであった<sup>(34)</sup>。これらの現地での実体験から得られた艦隊訪問の精神的な意義は、ブリュニクハウスの以下の言葉に顕著に表れている。

グナイゼナウの乗組員に示された多大の好意や心遣いは、慣習的な儀礼もしくは強要された演出から出たものではなく、実際には、比較的長い滞在やそれとともに生じる親密な交際が、すべての交流に自然の形で温情を秘めることにつながった。ドイツ人同士の間では共通の愛国心によって、オランダ人との間では相互の尊敬の念によってそれが強められたと私は全般的に感じた次第である<sup>(35)</sup>。

また、シュペー同様、ブリュニクハウスの報告書においても、オランダ領東インドの艦隊整備の問題が専門家の立場から分析され、そこでもやはり現地で広がる恐日感情が主要なテーマとなっていた。彼は、現地オランダ海軍の危機意識の本質は、「黄禍 (Die gelbe Gefahr)」、すなわち日本や(将来の)中国による侵攻への恐怖であると判断したうえで、今後予想されるオランダ海軍の建艦計画にドイツ造船業が目を向ける必要性を説いている<sup>(36)</sup>。

最後に、話題は植民地内の金融政策や人種の問題にまで及び、ブリュニクハウスの報告もシュペーのそれと同様、オランダの植民地統治に関するさまざまな情報を本国にもたらすこととなった<sup>(37)</sup>。

このように、東洋巡洋艦隊の東南アジア巡回行動を跡付けるなかから見えてくるその意義は以下の3点に集約される。第一に、中国水域での活動と同様、東洋巡洋艦隊の任務には、軍事的側面にとどまらない政治・経済・社会・文化におよぶ広範な最新情報の収集がその役割として与えられていた。東洋巡洋艦隊の報告は、現地の外交官たちからもたらされる情報を補完し、本国政府がより精度の高い情勢分析を行なううえで欠かせない情報源であったことがわかる。

第二に、艦隊の各地への訪問は、常に友好的な雰囲気醸し出しており、シュペーとブリュニクハウスに共通する認識として、オランダ人やイギリス人の親独感情と現地駐在ドイツ人の揺るぎない愛国心が読み取れる。この二つを育むことが巡回の重要な目的であり、現地植民地当局との善隣友好を図る「移動外交使節」としての役割、および、現地で活動する自国民を保護する意志を明確に示す「ショー・ザ・フラッグ (das Zeigen der Flagge)」としての威信高揚機能にこそ、東洋巡洋艦隊の東南アジア巡回の意義があったと思われる。そして、このような東南アジア方面への東洋巡洋艦隊の巡回はその後も繰り返され、現地の情報収集と並んで、さまざまな人的交流がなされたのであった<sup>(38)</sup>。

第三に、上記の「ショー・ザ・フラッグ」としての機能には、ドイツのパワーや威信を対外的に示すことも含意されていたが、これを通じてドイツの対外進出を加速するという効果も期待された。第一次世界大戦前、ドイツは重化学工業の急速な発展を背景として、ゴムやスズなどの資源調達の場合、投資先として蘭領東インドへ関心を強めており、この地への経済的・政治的進出は加速していた。また、東洋巡洋艦隊は、活動拠点・貯炭地として、ドイ

ツ本国と膠州湾、南洋植民地を結ぶ航路上の分岐点にある蘭領東インドの戦略的価値に着目していた<sup>(39)</sup>。しかしながら、このような政治的・軍事的プレゼンスを誇示する巡回行動が、諸刃の刃となりかねないことをドイツ側はどこまで認識していたであろうか。というのも、シュペーやブリュニクハウスの報告からは、各地のドイツ評がいかなるものであったかは伝わってこない。つまり、彼らは、東南アジアで広がる日本への恐怖心を過大評価するあまり、自身に対する周辺国の警戒心を低く見積もっていたのである。オランダやアメリカが自国の東南アジア植民地に対する日本の野心を警戒していたのは事実であるとしても、同様のことは、経済的な浸透を強めるドイツに対しても向けられていたのであり、艦隊の巡回は結果としてそれを強める作用も持っていたのである<sup>(40)</sup>。艦隊は、寄港地での交流によって相手の不安や警戒心を和らげる効果がある一方で、さまざまな疑心や憶測を呼びやすく、その存在自体が相手に脅威を与えることにつながるという逆説的な二面性を帯びていたのである<sup>(41)</sup>。

## 2. 南洋植民地と東洋巡洋艦隊

### (1) 1910年の南洋巡回行動

これまでは、東洋巡洋艦隊の中国、および東南アジア水域での活動を振り返り、その役割や意義を検証してきたが、艦隊には通常年1回の南洋植民地巡回任務もあった<sup>(42)</sup>。太平洋に広がる自国の植民地を年1回巡回する目的とは何であったのか。1910年と1913年の異なる司令官時代の南洋巡回を事例として取り上げ、東洋巡洋艦隊の南洋巡回の意義を検討してみよう。

1910年6月20日、東洋巡洋艦隊司令官ギュラー（Erich Gühler：在任1910年6月－1911年1月）少将が率いる装甲巡洋艦シャルンホルストと軽巡洋艦ニュルンベルクは、南洋巡回のために青島港を出港した。遠征には石

炭輸送船ティターニアが同行し、さらには上海でチャーターした汽船ゲルマニアが給炭の任務を担うことになっていた<sup>(43)</sup>。6月27日の朝にサイパン島に到着したシャルンホルストの最初の重要な任務は、自らの姿を現地で誇示することにあった。当時ドイツ領サイパンには、サモアから流刑されてきたサモア人首長たちが居住していたが、ギュラーはシャルンホルストの巨体を見せつけることで、彼らにドイツへの畏怖と忠誠心を植えつけようと考えていたのである<sup>(44)</sup>。ニュルンベルクと再合流したシャルンホルストは、次なる目的地であるトラック諸島に寄港したが、ここでもやはり、来航の目的は大型軍艦を原住民の目にさらすことにあった<sup>(45)</sup>。現地の管区行政官は、「たしかに、最近行なわれた非武装化により暴動の恐れはもうほとんどないが、近頃導入された労働税が騒擾を招くかもしれない」とギュラーに語っていることから、軍艦による威圧の意義は、艦隊司令官、植民地官吏双方の共通認識として確立していたことがわかる。

7月2日、シャルンホルストとニュルンベルクはポナベ島に到着し、この地で石炭輸送船ティターニア、ゲルマニアが合流した<sup>(47)</sup>。原住民の暴動に常におびえていたこの管区のドイツ人行政官にとっても、巡洋艦の来航はやはり長く待ち望んだものであった。「管区行政官ベーダーの申すところによれば、帝国軍艦の素早い出現とそれらの巨大さが原住民に与える目に見える作用は、深い印象を植えつけ、さらに帝国軍艦シャルンホルストの全上陸部隊が下船し、展開することによりその印象は一層強められた」<sup>(48)</sup>とあるように、この地でのデモンストレーションはかなり大掛かりなものであった。また、ギュラーの報告には、キリスト教の宣教団が教え子たちを引き連れてシャルンホルストの見学にやって来た光景が記されており、原住民への布教、教育という観点からも、島民の子弟に対する「教材」として軍艦の意義は認められていた<sup>(49)</sup>。ギュラーは、ポナベ人には行動をとる際の物事の基準が欠

けていると断定したうえで<sup>(60)</sup>、「今後服従を強いることが必要な場合に、実際にそのために十分な権力手段が帝国にはあるということをポナペ人はあらかじめ確信したことであろう」<sup>(61)</sup>と今回の来航の成果に自信を示している。

ポナペで石炭の補給を終え、7月7日に同地を出発したシャルンホルストとニュルンベルクは、クサイエ島、ナウル島に少々立ち寄った後、7月16日に今遠征の最大の目的地であるサモアのアピア港に到着した。シャルンホルストとニュルンベルクがアピア港に入港した際、同港には南洋水域を管轄する巡洋艦コンドルとコルモランのほか、南米航海への出発を控えていた巡洋艦エムデンが停泊しており、5隻の軍艦が一堂に集結した「華々しい光景」が見られた<sup>(62)</sup>。これらの大型で新式の巡洋艦の出現は、前年の騒擾が記憶に新しいサモアにおいても、現地在住のドイツ人たちにとって待ちに待った出来事であった。軍艦が到着する直前、サモアでは人頭税の増税が発表されており、「帝国のかなり印象深い軍事力の一部が滞在していたことは、サモア人たちにその義務を思い出させるうえでまさにうってつけであった」<sup>(63)</sup>という。現地に駐在するドイツ人が、軍艦来航をいかに渴望していたかは、その歓迎振りに表れていた。軍艦の同島滞在期間は祝祭週間として指定され、事前に設置された委員会が催事の企画にあたり、そのために寄せられた寄付はかなりの規模であったという<sup>(64)</sup>。

また、軍艦来航に対する原住民の反応についてもギュラーは触れており、彼らのために催された原住民による歓迎の会の様子に多くの紙数が割かれている。訪れた島内の各所における歓迎の宴や贈り物の贈呈、逆にドイツ人の側からは軍艦への招待と島の周遊旅行の際の乗船許可など友好的、平和的なエピソードが数多く盛り込まれ、軍艦の来航は支配者であるドイツ人と住民の間の友好関係を再確認する場と考えられた<sup>(65)</sup>。歓迎の宴の際に首長たちを代表した挨拶者が帝国政府へ忠誠を表明していたことに満足し、「最も興味深い未開民族のひとつ」であるサモア人の風習に個人的な好感を抱いてい

たギュラーは、彼らの風俗習慣や民族舞踊を維持するためにあらゆる尽力がなされることを保護者の観点から提言している<sup>(56)</sup>。

こうして、自らを「平和の守護者、シンボル」として位置づけ、サモアの情勢の安定化と軍艦来航の意義を聴衆の前で語ったギュラーは、支配者の力を示す手段として、シャルンホルストやニュルンベルクの来航が有意義であったことを繰り返し報告書に記している<sup>(57)</sup>。滞在最終日に上陸部隊による軍事パレードが開催されたことは、現地の人々に強い印象を残して立ち去るという念押しの間図もあったであろう<sup>(58)</sup>。ギュラーは報告書の最後の部分で、今回の訪問が原住民と現地の白人社会に対してきわめて好ましい作用を与えたと自信を持って語ったうえで、訪問が以後も繰り返されることを勧めている<sup>(59)</sup>。

サモアからの帰路においてギュラーは、マヌス島、アドミラルリテーツ諸島といったドイツ支配下の島々にできるだけ立ち寄りよう努めた。その目的は、若手の海軍将兵に各地を直接肌で知る機会を与えるという側面もあったが、やはりその意図するところは「ショー・ザ・フラッグ」による植民地統治の安定化への寄与であった<sup>(60)</sup>。

こうして非常に興味深かった東洋巡洋艦隊の南洋周遊航海は終了した。これに関して要約すれば、今回の航海は意図された目的を完全に達成することができたと言うことができる。いたるところ（ドイツ領島嶼の数多くの寄港地）で、軍艦の出現は強い印象を引き起こし、白人住民や原住民の間で帝国政府の威信を高め、現地行政官の難しい職務を楽にすることに寄与した。それと並んで、帝国海軍の将校団や兵員にそれほどなじみのないドイツ領南洋植民地を知り、その価値に気づく機会が与えられたならば、この点からも間接的に、および、時間の経過とともに、これらの植民地にとっての利益がもたらされるであろう。すでにサモアの報告で言及したように、ときおりこの種の訪問が繰り返されることは、非常に価値があるだろう<sup>(61)</sup>。



なお、東洋巡洋艦隊の南洋遠征は単に巡回行動そのもの、すなわち「ショー・ザ・フラッグ」だけを目的としたものではなかった。中国・東南アジア水域での活動と同様、現地の最新情報の収集と分析報告にも力が注がれていたのである。その詳細な中身には立ち入らないが、サイパン島の文化事業やプランテーションへの見込み、アメリカ大統領選挙がグアム島の将来に与える影響、ポナペ島の原住民の様子と開発への展望、サモア島の文化や社会の仔細、独領ニューギニアの開発の現状と今後の方策への提言などが盛り込まれ、自らの所見とともに本国に送信されている<sup>(62)</sup>。このように、ギューラーの南洋巡回報告を「情報収集」という観点から着目すれば、彼の収集した情報が、軍事問題という自身の専門領域にとどまらず、現地の行政や経済、文化にいたるまでさまざまなジャンルに及んでいた。つまり、中国や東南アジアでの活動と同様、海外駐在に任務につく海軍将校が幅広い見識の持ち主でなければならなかったということがわかる。

## (2) 1913年の南洋巡回行動

前節では、東洋巡洋艦隊の南洋植民地巡回には、被支配者への威信誇示や反乱抑止の意図が込められており、その報告書からは、「ショー・ザ・フラッグ」の効果に対する艦隊司令官の強い確信を読み取ることができた。それでは、南洋巡回の意義に対するこのような認識が、果たしてギューラーの個人的な性格や職務意識に基づくものにすぎなかったのであろうか。ここでは南洋巡回の別のケースを取り上げ、その際の活動や後任司令官の認識に踏み込むことで、東洋巡洋艦隊の南洋巡回行動の本質を追究してみたい。

1913年6月22日、東洋巡洋艦隊司令官シュペー少将率いる装甲巡洋艦シャルンホルストとグナイゼナウは、南洋巡回のために青島港を出港した。すでにその2日前に、軽巡洋艦エムデンと輸送・通信船ティターニアがヤップ島に向けて出発していた<sup>(63)</sup>。遠征部隊を率いる東洋巡洋艦隊司令官シュペー少

将にとって、石炭補給手段の確保は出発前に解決しておかなければならない重要な問題であった。当初、オーストラリアの石炭を現地調達するつもりであったが、シドニー総領事から炭鉱ストライキの情報を受け、急遽ニュージーランドのウェストポート炭を発注した。また、ティターニアとともに石炭の輸送を担う汽船のチャーターが試みられたが、東アジア水域の物流市場の過熱を受けて難航していたようである。上海の商社の仲介により、ようやくノルウェーの石炭輸送船エルヴィケン<sup>(64)</sup>を3ヶ月契約でチャーターすることに成功し、出立前に給炭の懸念は何とか払拭された。このように、太平洋に広がるドイツ植民地へ戦隊を組んで巡航する際に、ドイツ東洋巡洋艦隊は自前の石炭補給手段を有していないという致命的弱点を抱えていたのである。

補給のために一旦長崎に立ち寄ったシャルンホルストとグナイゼナウは、青島出港1週間後の6月29日に、最初の目的地であるドイツ領マリアナ群島の北部に到着した。さらにそこから、グナイゼナウが近隣のアグリガン島とパガン島に向かう一方、シャルンホルストはサイパン島を経由し、カロリン諸島を素通りして7月6日にアドミラルリテーツ諸島のマヌス島に到着した。輸送船エルヴィケンから石炭を補給するために寄港したシャルンホルストにとって、ここではもうひとつ重要な恒例行事が待っていた。当時、村同士の抗争やカニバリズムの横行を危惧する現地のドイツ人行政官にとって、手持ちの50名の警察隊（原住民）だけでは心もとなかった。それゆえ、シャルンホルストが当地に来航した際、軍事力の誇示による反乱抑止効果が期待されていたのである<sup>(65)</sup>。

大きな軍艦をできるだけ多くの原住民の目に触れさせ、島内でその来航を知らしめるために、行政官は平静な村落の20名の首長たちをその従者とともにステーションに呼び出した。到着の翌日、彼らは見学のためにカヌーで艦にやって来た。同時に、原住民により構成された警察部隊の目にも艦がさらされた。彼らはなかでも戦闘準備態勢にある砲郭、砲塔などを案内された。特に印象を残したのは、

4丁の機関銃の射撃と8.8センチ速射砲による強烈な砲撃の姿であった。驚嘆に値するすべてのものを見た彼らはわめき歓喜したのであった<sup>(66)</sup>。

私はマヌスで、同地の訪問がおそらく良好な印象を引き起こしたと認識した。到着初日に私がある村を訪れたとき、住民は消え去っており、姿を現しても無事だという同行していた長の保証に基づき、数名だけが出てきた。2日目に首長たちが艦を訪問した後、私は二つの別の村を訪ねたが、このとき原住民たちは物おじせず、近寄ってきた。彼らはおそらく軍艦の力を認識したのであり、しかしまた、この件からわかるように信頼感をも抱くようになったのである<sup>(67)</sup>。

マヌス島に3泊滞在したシャルンホルストは、ヘルミッツ諸島を経て、7月11日、僚艦エムデンが待つフリードリヒ・ヴィルヘルムスハーフェンに入港した。ここでは、前年に白人殺害事件が多発し、土地分割に対する原住民の不満から暴動未遂事件も起きていたことから、軍艦寄港地に多数の原住民が呼び寄せられ、彼らの目の前で上陸部隊のパレードが催された<sup>(68)</sup>。その後、7月17日にシャルンホルストは装甲巡洋艦グナイゼナウ、軽巡洋艦コルモラン、プラネートが待つニュー・ブリテン島のラバウルに到着し、さらに2日後には軽巡洋艦エムデンがこの地に入港した。やはりここでも、来航後多くの首長たちが集められ、居並ぶ軍艦の威圧感と上陸部隊によるパレードを通してドイツの力がまざまざと示されたのであった<sup>(69)</sup>。

当初ラバウルでも東洋巡洋艦隊来航を歓迎するさまざまな催しが予定されていたが、中国情勢の悪化を理由とする突然の帰還命令により出港を余儀なくされ、以降の巡回予定もすべて中止された<sup>(70)</sup>。突然の事態により遠征途上で帰路につかなければならなくなったものの、シュペーは今回の南洋巡回の成果を確信し報告書にまとめている<sup>(71)</sup>。そして3年前のギュラー司令官の結論と同様、シュペーは東洋巡洋艦隊の定期巡回の意義を強調し、今後もこれが繰り返されることを希望している<sup>(72)</sup>。それゆえ海軍は、中国情勢の平穏化という条件付きで翌年の巡回計画を早々に決定した。こうして、1914年

6月、シャルンホルスト、グナイゼナウ、ニュルンベルクと石炭輸送船は3ヶ月予定の南洋巡回に出発したが、サラエボに発する危機と大戦勃発のさなか艦隊の南洋巡回はカロリン諸島で中断され、ヨーロッパへの逃避行、およびその途上のフォークランド沖海戦において全滅に至るのであった<sup>(73)</sup>。

以上述べてきたように、艦隊巡回が持つ反乱抑止効果へのシュペーの自信は、先ほどのギュラーのものとは一致しており、東洋巡洋艦隊司令官に共通する認識であったといえる。他方、艦隊を迎え入れる側であった独領ニューギニア総督も東洋巡洋艦隊の来航の意義を認め、巡洋艦による各地の巡回が継続してなされることを本国に希望している<sup>(74)</sup>。それでは、実際にこのように毎年繰り返された東洋巡洋艦隊の南洋巡回は、彼らの思惑通り、現地住民の反乱を未然に抑止することに成功していたのであろうか。本稿は支配者であるドイツ側の史料（報告書）に依拠した結果、あくまでもドイツ側の認識のなかでの軍艦の効用や植民地統治の実像を示したにすぎない。それゆえ、現実の様相と照らし合わせることで、ドイツ人の認識にどのような問題が含まれていたのか最後に確認してみたい。

ギュラー艦隊のポナペ島訪問（1910年7月）とその際の管区行政官ベーダーの歓喜の様子は前述したとおりであるが、それによって自信を得たベーダーは、直後に島民への「義務労働」（Pflichtarbeit）の導入を強行し、反抗的な島民には容赦ない殴打の刑を行なった。こうした彼の無思慮な行動は、ミクロネシア過去最大級の島民の蜂起を招き、そのさなかベーダーは部下とともに殺害され、「懲罰」に訪れた東洋巡洋艦隊の陸戦隊も不慣れな内陸部での戦闘によって甚大な被害を受けることになる<sup>(75)</sup>。前述した7月の巡洋艦隊の来訪からわずか3ヵ月後の出来事であった。その他にも、太平洋のドイツ植民地で反乱が絶えなかった現実を考えると、艦隊司令官や現地行政官が示したあのような反乱抑止効果への自信はいったい何であったのかと考えざるを得ない<sup>(76)</sup>。

そもそも、南洋植民地の反乱鎮圧という面で東洋巡洋艦隊が十分な機能を有していたかは、以下の諸点に鑑みて疑問の余地がある。つまり、①蜂起した原住民は艦砲の射程外である内陸の茂みに逃げ込みゲリラ戦で応じていたこと、②反乱勃発に際して、無線電信の未整備ゆえ島の外部への応援要請にかなりの時間を要したこと<sup>(77)</sup>、③反乱鎮圧のためにドイツはメラネシア系の原住民から構成される警察部隊を保有しており、気候や地勢面で不慣れな海軍陸戦隊よりも効果的な展開が可能であった。さらには、その実用性のみならず、この警察部隊に対する「人喰い警察隊」という風評を利用して、ドイツ側は反抗的な部族に恐怖心を抱かせることができたこと<sup>(78)</sup>、④東洋巡洋艦隊主力艦の巡回が年1回程度にすぎなかったこと。以上のことから、南洋における東洋巡洋艦隊の存在意義には限界があったことがわかる<sup>(79)</sup>。それゆえ、艦隊の巡回はドイツ側が考えるほど効果があったわけではなく、支配者側であるドイツ人の認識と現実の間にはギャップがあったのである。原住民は確かに軍艦の来航によって何らかの威圧感を感じたであろうが、それでも行政官による理不尽な要求や尊厳を傷つけられた際には、反乱という形で断固たる行動を起こした。ドイツ側はこのような原住民の心情やその社会の伝統、価値観に十分通じることなく、近代的・文明的な利器である軍艦を見せることで原住民はひるみ、屈服するであろうと思ひ込み安心して圧政を継続した結果、度重なる反乱を招いたのである。

また、この一人よがりという点に関していえば、そもそも、艦隊の示威が原住民に向けられていたというよりも、現地に駐在する役人や商人、農場主や宣教師といった白人に向けられていたと考えることができる。これまで見てきたように、軍艦の来航はもっぱら原住民の目を意識し、彼らに「知らしめる」ためのものとドイツ人は考えていたが、実は自分たち自身の安心を得て、威信の高揚に満足するためのものにすぎなかったのではないか。つまり、本稿で取り上げた艦隊司令官や現地行政官の文言からは、「気休め」や「精

神安定」,「自己満足」としての艦隊巡回像が浮かび上がるのであり、逆に言えば、それだけ支配者側の白人が反乱におびえて暮らしており、自分たちの支配体制に確固たる自信がなかったかという気持ちの裏返しでもある。

さらには、南洋植民地の支配と軍艦の巡回の関係性から、植民地進出の後進国であるドイツ独特のメンタリティも読み取ることができる。つまり、世界の支配者側の列に遅れて加わったドイツには、植民地支配者の資格があることを他の西洋諸国に示す必要があった。それゆえ、統治を預かる西洋の同胞として、いざという時には自国民はもちろんのこと、現地の白人社会全体の利益を守るという姿勢を示し続けることが肝要であり、その表現手段として東洋巡洋艦隊の定期巡回が行なわれたと考えることができる<sup>(80)</sup>。非西洋支配の実績に劣るドイツにとって、世界大国であり文明国の一員であることを世界に示さなければならないという強迫観念はそれだけいっそう大きなものであった。そのため、この劣等意識（コンプレックス）と文明化に寄与しているという思い込みが入り混じって、原住民の慣習や心情を顧みることなく西洋の価値観に基づく統治（強制的な公共事業や租税制度、懲罰制度の導入など）を断行し、原住民の抵抗を招く結果となった。こうして、数少ない頼みの綱である東洋巡洋艦隊への期待はいっそう膨らみ、その巡回の効果を実態以上に過大評価してしまう落とし穴に陥ってしまったのであった。

## おわりに

これまで見てきたとおり、ドイツ東洋巡洋艦隊は、有事における自国民保護や砲艦外交、敵国の通商破壊の尖兵としての役割にとどまらず、相互交流の手段、情報収集、植民地統治の道具として多面的な機能を併せ持っていた。第一次世界大戦の勃発とともに無残な最期を迎え無力を露呈した東洋巡洋艦隊であったが、平時にこそ活躍の場が見出されていたのであり、「交流」「情

報収集」「ショー・ザ・フラッグ」にその存在意義を有していたといえる。

とはいえ、東洋巡洋艦隊はアジア・太平洋にまたがる広大な領域をカバーしていたことから、課せられた使命は活動する地域ごとに異なっていた。他国の支配圏が広がり、そのなかで自国の権益を護持・拡大していく必要があった中国・東南アジア水域では、交流による列強との協調関係維持や各地の情報収集に重きが置かれていた。さらには、台頭著しい日本の動向への注視のほか、戦争や革命などの不測の事態へ迅速に対応するための準備が整えられていたことはすでに見たとおりである。

それに対して、距離的にも通信事情の面でも、危機に際しての艦隊急派が困難であった南洋においては、「ショー・ザ・フラッグ」による支配者としての威信の高揚や反乱の未然の抑止が平時における艦隊の重要な任務となっていた。この点は、同じ自国の支配圏ではあっても、大規模な治安部隊(Schutztruppe)を抱え、緊急時には本国から数ヶ月以内に救援隊が駆けつけることができたアフリカ植民地とは事情が異なる。つまり、アフリカではドイツ治安部隊という目に見える安心装置を備えていたのに対し、太平洋の孤島では限られた数の警察隊、しかも非白人の部隊によって治安を維持しなければならないという現実があった<sup>(81)</sup>。それゆえ、現地の白人社会にかかる心理的負荷は大きく、時折訪れる軍艦の姿は実物以上に頼もしい存在に映ったのである。

また、東アジアとの相違点として、南洋の島民は大型艦や近代的な武装を施した陸戦隊に常日頃から見慣れているわけではないので、適度に繰り返される巡洋艦隊の来航と軍事パレードによって島民を驚愕させることができるとドイツ側は信じた。つまり、東洋巡洋艦隊の来航によって、自分たちの背後にいるドイツの本当の力を原住民たちは想起し、そのドイツの支配に立ち向かうようなことはないであろうと確信したのである。こうして、この本国からはるか遠方の地においてもドイツの威厳が守られたことに満足し、そこ

で得られた安心感が植民地統治の精神安定機能を果たしていた。太平洋の孤島で圧倒的多数の原住民に取り囲まれたドイツ人行政官が、あえて強圧的な統治を敢行した背景には、「文明化の使命」への確信や緊急時の原住民警察隊への依存などととも、東洋巡洋艦隊の定期的な来航がもたらした過剰な自信があったのである。

しかしながら、年1回程度の巡洋艦隊の訪問が期待通りの効果を上げていたかどうかについて疑問の余地がある点はすでに述べたとおりである。この現実と認識のギャップは、1900-14年の南洋における反乱や事件の続発という客観的事実に何よりも示されている<sup>(82)</sup>。そもそもヨーロッパ水域への戦艦配置を最重要視する当時のドイツの海軍戦略のもと<sup>(83)</sup>、限られた艦艇と人員に抑えられた東洋巡洋艦隊が東アジアの水域に加え、1350万km<sup>2</sup>もの広大な水域に点在する南洋島嶼植民地で効果的な役割を果たすには限界があったといえよう。軍艦の宿命であるドックでの定期補修や兵員の陸上での休息の必要性、石炭補給問題や経済的制約のほか、上述のように、東アジア・東南アジア水域での巡回や交流、「ショー・ザ・フラッグ」や緊急対応といった多重な負荷が東洋巡洋艦隊にはかかっていた。このように、ヨーロッパ水域重視の海軍戦略（「ティルピッツ計画」）のもと、戦力の拡充や貯炭基地の整備は当面期待できない状況にあったにもかかわらず、本国の「世界政策」（Weltpolitik）の展開や経済的膨張に伴い、東洋巡洋艦隊に求められる活動領域は拡大する一方であった。こうして、アジア・太平洋水域におけるドイツ東洋巡洋艦隊には、単なる外地派遣艦隊としての役割にとどまらず、本国の「世界政策」と海軍戦略の間に生じた隙間を埋める重要な使命が課せられていたのであった。



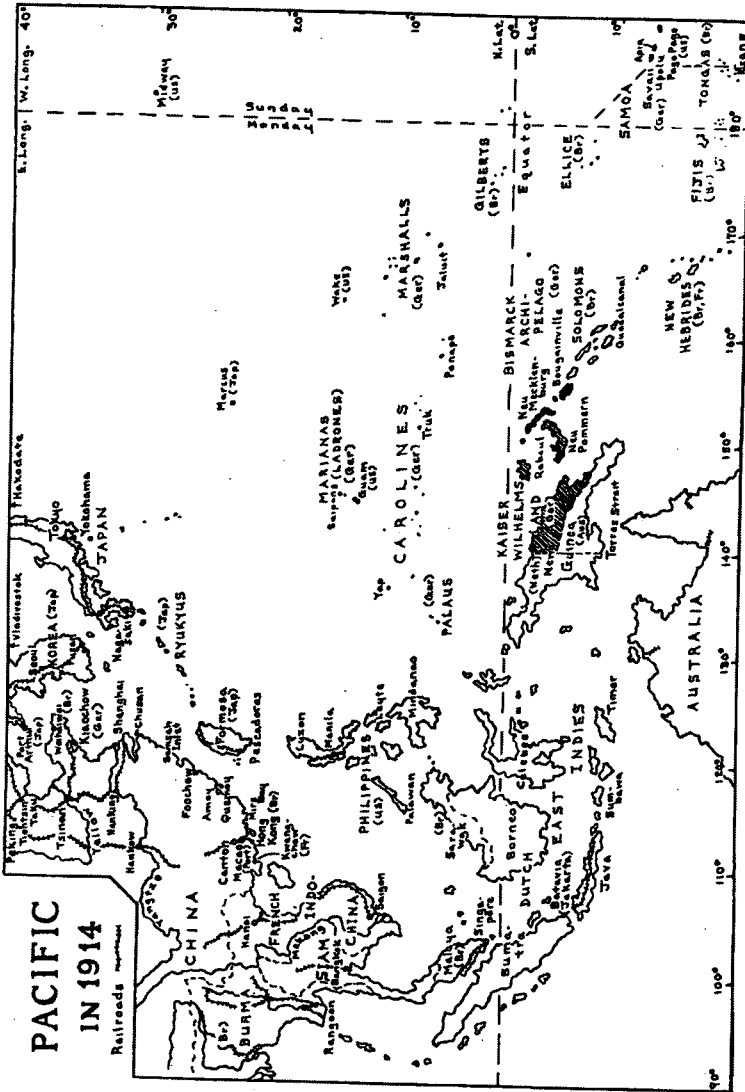


図 第一次世界大戦前のドイツ帝国のアジア・太平洋植民地  
 出典：Moses, John/Kennedy, Paul (eds.), *Germany in the Pacific and Far East 1870-1914* (St. Lucia, 1977), p. 123.

【注】

- (1) 拙稿「19世紀末ドイツ帝国の膠州湾獲得」『政治学研究論集』（明治大学）27, 2008年。浅田進史「膠州湾租借条約の成立」工藤章, 田嶋信雄編『日独関係史 1890-1945 I 総説／東アジアにおける邂逅』東京大学出版会, 2008年所収。
- (2) 加藤高明伯伝編纂委員会編『加藤高明』下巻, 原書房, 1970年, 73頁。
- (3) 外務省編纂『日本外交文書 大正3年第3冊（大正期第6冊）』外務省, 1966年, 145頁「文書154 8月15日閣議決定 対独最後通牒文」。
- (4) Walle, Heinrich “Das deutsche Kreuzergeschwader in Ostasien 1897 bis 1914. Politische Absichten und militärische Wirkung,” in: Deutsches Marine Institut (Hrsg.), *Der Einsatz von Seestreitkräften im Dienst der auswärtigen Politik* (Herford, 1983).
- (5) Ganz, Albert Harding, *The Role of the Imperial German Navy in Colonial Affairs* (Ann Arbor Mich., 1972). Id., “The German Navy in the Far East and Pacific. The Seizure of Kiautschou and After,” (以下, Ganz, the German Navy と略記) in : Moses, John/Kennedy, Paul (eds.), *Germany in the Pacific and Far East 1870-1914* (St. Lucia, 1977). Gottschall, Terrell, *By Order of the Kaiser. Otto von Diederichs and the Rise of the Imperial German Navy, 1865-1902* (Annapolis, 2003), Ch. 6, 7.
- (6) Eberspächer, Cord, *Die deutsche Yangtse-Patrouille. Deutsche Kanonenbootpolitik in China im Zeitalter des Imperialismus 1900-1914* (Hamburg, 2002) (以下, Eberspächer, Yangtse と略記). Ders., “Deutsche Kanonenbootpolitik in Ostasien,” in: Klüver, Hartmut (Hrsg.), *Auslandseinsätze deutscher Kriegsschiffe im Frieden* (Bochum, 2003).
- (7) Overlack, Peter, “German Interest in Australian Defence, 1901-1914. New Insights into a Precarious Position on the Eve of War,” in: *The Australian Journal of Politics and History*, 40-1 (1993). Id., “German Commerce Warfare Planning for the Australian Station, 1900-1914,” in: *War and Society*, 14-1 (1996). Id., “The Force of Circumstance Graf Spee’s Options for the East Asian Cruiser Squadron in 1914,” in: *The Journal of Military History*, 60-4 (1996). Id., “The Function of Commerce Warfare in an Anglo-German Conflict to 1914,” in: *The Journal of Strategic Studies*, 20-4 (1997). Id., “German War Plans in the Pacific 1900-1914,” in: *The Historian*, 60-3 (1998). Id., “Asia in German Naval Planning before the First World War. The Strategic Imperative,” in: *War and Society*, 17-1 (1999). 20世紀初頭にドイツ海軍がオーストラリア水域で収集した情報やそれに基づく作戦計画文書

- を編纂した以下の史料集も刊行されている。Tampke, Jürgen (ed.), *Ruthless Warfare. German Military Panning and Surveillance in the Australia-New Zealand Region before the Great War* (Canberra, 1998).
- (8) Nuhn, Walter, *Kolonialpolitik und Marine. Die Rolle der Kaiserlichen Marine bei der Gründung und Sicherung des deutschen Kolonialreiches 1884-1914* (Bonn, 2002). Krug, Alexander, „Der Hauptzweck ist die Tötung von Kanaken.“ *Die deutschen Strafexpeditionen in den Kolonien der Südsee 1872-1914* (Tönning/Lübeck/Marburg, 2005). また、1910-11年のボナベ反乱への出勤を取り上げた以下の事例研究がある。Christmann, Helmut, “Zur Rolle der Kaiserlichen Marine in den deutschen Kolonialgebieten der Südsee,” in: *Marine-Rundschau*, 84-3 (1987).
- (9) 「南洋」「南洋群島」という用語は、明治以降の日本の歩みとともにその使われ方が変化していたこともあり複雑性を帯びた概念である。しかしここでは、ミクロネシア、メラネシア、ポリネシアを包含するドイツ語の Südsee の訳語として「南洋」および「南洋群島」という語句を用いる。具体的には、東西4500km、南北3000kmに広がるニューギニア北東部（カイザーヴィルヘルムスラント）、ビスマルク諸島、ソロモン諸島北部（ブーゲンビル島、ブカ島）、カロリン諸島、マリアナ群島（グアム島を除く）、パラオ諸島、トラック諸島、マーシャル諸島から構成される行政単位である「独領ニューギニア」とウボル・サバイイ両島を中心とする「（独領）サモア」を指す。太平洋学会編『太平洋諸島百科事典』原書房、1989年、352頁「南洋」、356頁「南洋諸島」。
- (10) 本稿では、フライブルクの連邦軍事公文書館所蔵の帝国海軍関係文書（BA/RM）とベルリン・リヒターフェルデの連邦公文書館に保管されている帝国植民地省関係文書（BA R1001）を併用した。
- (11) Hildebrand, Hans H., *Die organisatorische Entwicklung der Marine nebst Stellenbesetzung 1848 bis 1945*, Bd. 1 (Osnabrück, 2000), S. 318-322. Gröner, Erich/Jung, Dieter/Maass, Martin, *Die deutschen Kriegsschiffe 1815-1945*, Bd. 1 (Koblenz, 1989). Walle, a. a. O.
- (12) *Marine-Rundschau*, 22 (1911), “Der militär-politische Dienst des ostasiatischen Kreuzergeschwaders in China.” Eberspächer, Yangtse, S. 286-301.
- (13) Rieve an Kaiser vom 15. 8. 1911, BA/RM 2/1757, Bl. 91-97.
- (14) Ahvenainen, Jorma, “The Question of German Information Services in the Far East before the First World War,” in: *Scripta Historica*, Tomus II (1969).

第一次世界大戦前のアジア・太平洋地域におけるドイツ海軍

- (15) Rieve an Kaiser vom 15. 8. 1911, BA/RM 2/1757, Bl. 91-93.
- (16) Ebenda, Bl. 94. 1910年12月、香港滞在中にアクシデントで足を骨折した東洋巡洋艦隊司令官キューラーは、その際にイギリス政庁や在住イギリス人から寄せられた懇切な対応を、現地におけるドイツ人とイギリス人の良好な関係を反映したものと見ていた。Gühler an Kaiser vom 23. 12. 1910, RM2/1757, Bl. 5. 逆に、1911年1月、揚子江流域の漢口でイギリスの警察に対する住民の暴動が発生した際、ドイツは救援のために軍艦4隻を急派していた。この措置に対して、イギリスの総領事、北京駐在公使、外務省はそれぞれドイツ側に謝意を表明している。Unruhen in Hankau (von Nysing) 1. 2. 1911, RM2/1757, Bl. 36-38.
- (17) 第一次世界大戦勃発直前、英海軍の装甲巡洋艦グッドホープが青島を訪問し、英独水兵間のサッカー大会など和やかな交流が行なわれていた。当時のドイツ海軍将校の回顧によると、その際の友好に満ちた交流からは、半年後の悲劇など予想することができなかったという。すなわち、1914年11月にチリ・コロネル沖でグッドホープはドイツ東洋巡洋艦隊の砲撃を受け、乗組員全員とともに海中に沈むことになるのである。Plüschow, Gunther, *Die Abenteuer des Fliegers von Tsingtau. Meine Erlebnisse in drei Erdteilen* (Berlin, 1936), S. 26.
- (18) Stingl, Werner, *Der Ferne Osten in der deutschen Politik vor dem Ersten Weltkrieg 1902-1914*, Bd. 2, (Frankfurt a. M., 1978), S. 665-666.
- (19) 1911年9月、呉淞-南京を航行した砲艦ティガーからもたらされた報告には、現地の洪水の惨状と今後に与える影響の分析、また、南京での米アジア艦隊司令官との会談から、当地におけるアメリカの動向が伝えられている。Luppe an Krosigk vom 22. 9. 1911, BA/RM 2/1757, Bl. 155-157.
- (20) Heeringen an Kaiser vom 17. 11. 1911, BA/RM 2/1757, Bl. 161.
- (21) Ebenda, Bl. 160-161.
- (22) Ebenda, Bl. 159-160. Heeringen an Kaiser vom 2. 11. 1911, BA/RM 2/1757, Bl. 150-154.
- (23) 青島守備隊を主体とするドイツの中国駐屯軍は、日英米仏露にはるかに劣っており、「列強」の水準にないその規模は中国在住ドイツ人の不安をかき立てていた。Stingl, a. a. O., Bd. 2, S. 667-669.
- (24) Krosigk an Kaiser vom 13. 7. 1912, BA/RM 2/1758, Bl. 43-46. なお、東洋巡洋艦隊司令官は艦隊の公式活動とは別に、個人的に(軍艦を使わずに)中国各地を訪問することもあった。本論の筋から離れるのでここではその詳細については触れないが、1912年10月から11月にかけてクロズィクは旅順、大連、

北京を訪れた後、中国北部と揚子江を結ぶ大動脈であった津浦鉄道を利用してその沿線を旅した。ドイツが建設に関わったこの鉄道の状況や革命後の中国各地の情勢を自ら探ったうえで、彼は詳細な長文のレポートを本国に送付している。Krosigk an Kaiser vom 1. 12. 1912, BA/RM 2/1758, Bl. 162-171.

- (25) Rieve an Kaiser vom 15. 8. 1911, BA/RM 2/1757, Bl. 94-97.
- (26) Spee an Kaiser vom 25. 2. 1913, BA/RM 2/1758, Bl. 207-208.
- (27) Ebenda, Bl. 208-209.
- (28) 当時、ドイツは独領ニューギニア開発のためにジャワ島出身労働者（クーリー）の大量確保に力を入れていた。それゆえ、東洋巡洋艦隊は、オランダ当局との親密な関係を保つことで外交事案の解決を後押しするという役割も担っていた。Doel, H. Wim van den, "Nachbarn an Peripherie. Die Beziehungen zwischen Niederländisch-Ostindien und den deutschen Südseekolonien," in: Hiery, Hermann Joseph (Hrsg.), *Die deutsche Südsee 1884-1914. Ein Handbuch*, 2. Aufl. (Paderborn / München / Wien / Zürich, 2002), S. 777-783. また、直後のシンガポール訪問でも、同様にイギリス当局との友好促進に重きが置かれた。Spee an Kaiser vom 25. 2. 1913, BA/RM 2/1758, Bl. 216-217.
- (29) Ebenda, Bl. 210-213.
- (30) Ebenda, Bl. 213-215. 東南アジアで広がる日本の侵略への恐怖心は、1914年3月のフィリピン独立問題に関する東洋巡洋艦隊司令官報告（シュペー報告）のなかにも見受けられる。Spee an Kaiser vom 20. 3. 1914, BA/RM 2/1759, Bl. 175.
- (31) Werner, Reinhold, *Die Preussische Expedition nach China, Japan und Siam in den Jahren 1860, 1861 und 1862*, 2. Aufl. (Leipzig, 1873), S. 525-526. Fenske, Hans, "Imperialistische Tendenzen in Deutschland vor 1866. Auswanderung, überseeische Bestrebungen, Weltmachtträume," in: *Historisches Jahrbuch Görres Gesellschaft*, 97/98 (1978), S. 363-364.
- (32) Spee an Kaiser vom 25. 2. 1913, BA/RM 2/1758, Bl. 215-216.
- (33) Brüninghaus an Spee vom 12. 2. 1913, BA/RM 2/1758, Bl. 221.
- (34) Ebenda, Bl. 221-223.
- (35) Ebenda, Bl. 222.
- (36) Ebenda, Bl. 223-224.
- (37) Ebenda, Bl. 219-220, 225-226. ドイツにとってのオランダ領東インドの戦略的重要性は、本国の海軍軍令部においても十分認識されていた。Heeringen an Tirpitz vom 16. 9. 1911, BA/RM 2/1757, Bl. 98-100.
- (38) 1913年12月から1914年2月にかけて行われた東南アジア遠征においては、

## 第一次世界大戦前のアジア・太平洋地域におけるドイツ海軍

前年にはなかったバンコク、マニラ訪問が旅程に組み込まれた。Reiseplan vom 26. 11. 1913, BA R1001/2660, Bl. 60-62. Spee an Kaiser vom 28. 1. 1914, BA/RM 2/1759, Bl. 167-172.

- (39) Meyer, Günther, "German Interests and Policy in the Netherlands East Indies and Malaya, 1870-1914," in: Moses/Kennedy (eds.), op. cit., pp. 45-48. 米西戦争でのサンティアゴ湾封鎖や日露戦争時の旅順封鎖の教訓として、戦時に際して東洋巡洋艦隊は、膠州湾を離れ蘭領東インドのスンバワ島を集結基地とすることが取り決められていた。Ganz, The German Navy, p. 126, 130.
- (40) 1909年、東洋巡洋艦隊の所属戦隊（軽巡洋艦ライプツィヒ、アルコナ、砲艦ヤーグアー、輸送艦ティターニア：指揮官は東洋巡洋艦隊司令官ケルパー Carl Coerper 中将）のサモア遠征計画が公になった際、ドイツによる南方での領土拡張、艦隊基地建設のうわさがシドニーのメディアを通じて広がった。ドイツ側は慌ててこの情報を否定したが、オセアニア地域の人々がドイツの行動いかに敏感であったかがこの事例に示されている。Bericht an Büllow vom 19. 3. 1909, BA R1001/2663, Bl. 25-28.

また、1913年1月の装甲巡洋艦シャルンホルストとグナイゼナウによる東南アジア遠征において、当初フィリピン訪問が予定されていたが、現地の領事の進言に基づいてマニラ寄港は中止された。背景には、アメリカの民主党への政権交代によりフィリピン独立の可能性が浮上し、それゆえドイツ艦隊のタイムリーな訪問は併合の野心と疑われかねず、逆に、現地のドイツ権益排除の口実に使われる恐れがあると判断したからであった。Spee an Kaiser vom 25. 2. 1913, BA R1001/2655, Bl. 192-193.

実際、第一次世界大戦前のドイツ海軍は、対米・対英戦を想定したアジア・太平洋地域での通商破壊作戦を検討していた事実が明らかになっている。また、その作戦の主体となる東洋巡洋艦隊は、英豪米などでは有事における最も危険な存在として見られていた。註7の諸研究を参照。

- (41) 艦隊が抱えるこの宿命的な二面性については、歴史上さまざまな局面で見出される。宮里立士「日露戦後における日米関係の一面面 アメリカ主力艦隊世界周航と日本寄港問題の新聞報道を中心に」『メディア史研究』16, 2004年。
- (42) 東洋巡洋艦隊の主力部隊が参加する大規模な南洋巡回は、通常年1回を予定されていたが、それ以外のときには太平洋保護領の海域を担当するステーション巡航艦が、平時の巡回の任に就いていた。Zuckschwerdt an Kaiser vom 30. 5. 1914, BA R1001/2656, Bl. 117-131. Reiseplan S.M.S. "Condor" vom 8. 12. 1913, BA R1001/2660, Bl. 65. Reiseplan S.M.S. "Cormoran" vom 12. 12. 1913, BA R1001/2660, Bl. 68. Reiseplan S.M.S. "Cormoran" vom 23. 3. 1914, BA

R1001/2660, Bl. 79.

- (43) Gähler an Kaiser vom 23. 7. 1910, BA R1001/2654, Bl. 56.
- (44) Ebenda, Bl. 58-59. 首長たちがこの地に移送される背景となった1909年のサモアの騒擾も、軍艦の急派によって事態は鎮静化されていた。Hempenstall, Peter J., "Native Resistance and German Control Policy in the Pacific. The Case of Samoa and Ponape," in: Moses/Kennedy (eds.), op. cit., pp. 222-224. Hempenstall, Peter J., "Grundzüge der samoanischen Geschichte in der Zeit der deutschen Herrschaft," in: Hiery (Hrsg.), a. a. O.
- (45) Gähler an Kaiser vom 23. 7. 1910, BA R1001/2654, Bl. 64.
- (46) Ebenda.
- (47) Ebenda, Bl. 51.
- (48) Ebenda, Bl. 69.
- (49) Ebenda, Bl. 72.
- (50) そもそもドイツ人やドイツ自体についてまったく知らない原住民が多々いる事実をギュラーは指摘している。Ebenda, Bl. 70.
- (51) Ebenda, Bl. 69.
- (52) Gähler an Kaiser vom 7. 9. 1910, BA R1001/2654, Bl. 117-118.
- (53) Ebenda, Bl. 130. 混乱を招く恐れのある諸制度の改革に際しても、同様に軍艦が活用されることをギュラーは提起している。Ebenda, Bl. 151-152.
- (54) Ebenda, Bl. 118-119.
- (55) Ebenda, Bl. 138.
- (56) Ebenda, Bl. 126.
- (57) Ebenda, Bl. 124-125. 船に複数の煙突がついていることこそ、普段そのような船を見慣れていないサモア人に対する示威として重要な意味を持っていたとギュラーは指摘している。というのも、通常この地に姿を見せるステーション巡航艦のコンドルとコルモランは、「我々サモア式の船」と呼ばれ低く見られていたのに対し、今回訪れたシャルンホルストの艦長を「4本煙突の艦長」、エムデンやニュルンベルクの艦長を「3本煙突の艦長」とサモア人は呼んで特別視していた様子が伝えられる。Ebenda, Bl. 142-143.
- (58) Ebenda, Bl. 166-167.
- (59) Ebenda, Bl. 167.
- (60) Gähler an Kaiser vom 15. 9. 1910, BA R1001/2654, Bl. 87.
- (61) Ebenda, Bl. 106-107.
- (62) Gähler an Kaiser vom 23. 7. 1910, BA R1001/2654, Bl. 60-64, 70-73. Gähler an Kaiser vom 15. 9. 1910, BA R1001/2654, Bl. 93-104. Gähler an Kaiser vom

7. 9. 1910, BA R1001/2654, Bl. 119-126.
- (63) Spee an Kaiser vom 4. 8. 1913, BA R1001/2655, Bl. 330.
- (64) Ebenda, Bl. 330-331.
- (65) Ebenda, Bl. 339-340.
- (66) Ebenda, Bl. 341.
- (67) Ebenda, Bl. 357.
- (68) Ebenda, Bl. 344.
- (69) Ebenda, Bl. 350. ラバウルでは、シャルンホルスト到着に先立ってグナイゼナウが姿を見せた際、これがイギリスから借りたものであると一部の原住民に錯覚されていた。それゆえ総督は、ドイツの威信を誇示するために軍艦集結によるデモンストレーションを欲していたという。Ebenda, Bl. 357-358.
- (70) Ebenda, Bl. 350. 7月21日にヤップ島経由の無線電信で帰還命令を受けたシュペーは、同日すぐにラバウルを出立した。それぞれ別の場所にいたグナイゼナウ、エムデン、ティターニアも各自任務を中止し、一路青島をめざした。なお、当初の遠征計画では、ラバウルを7月26日に出発し、フィジーのスパを経て8月11日にドイツ領サモアのアピアに到着する予定であった。2週間のサモア滞在後は、カロリン諸島のボナベを経由して、9月20日に青島に寄港することになっていた。Reiseplan für die Südseereise vom 8. 6. 1913, BA R1001/2660, Bl. 27. Reiseplan S.M.S. "Gneisenau" vom 28. 6. 1913, BA R1001/2660, Bl. 29.
- (71) これまで取り上げた司令官同様、シュペーも巡回の過程で得た情報を本国へ送信している。訪問した各地の自然状況や原住民の様子、とりわけ、産業開発の現状が詳細なデータとともに提示されるとともに、経済問題以外にも、労働、治安・警察、教育、医療、海上交通、人口構成など現地社会の状況に関するあらゆる分析と提言がそこには盛り込まれていた。Spee an Kaiser vom 4. 8. 1913, BA R1001/2655, Bl. 333-336, 339ff., 346-350.
- (72) Ebenda, Bl. 358. その際、シュペーは自らの経験に基づいて、貯炭所の必要性を力説したが、この石炭貯蔵体制の不備は、結局第一次世界大戦に至るまで改善されることはなかった。Hiery, Hermann, *The Neglected War. The German South Pacific and the Influence of World War I* (Honolulu, 1995), p. 11.
- (73) Raeder, E. (Bearb.), *Das Kreuzergeschwader* [Marine-Archiv (Hrsg.)], *Der Krieg zur See 1914-1918. Der Kreuzerkrieg in den ausländischen Gewässern*, Bd.1](Berlin, 1922), S. 61ff.
- (74) Hahl an Mommsen vom 5. 8. 1913, BA R1001/2655, Bl. 386-388.



- (75) Krug, a. a. O., S. 313-347.
- (76) Hemenstall, Peter J., *Pacific Islanders under German Rule. A Study in the Meaning of Colonial Resistance* (Canberra, 1978) (以下, Hemenstall, Pacific と略記). Krug, a. a. O.
- (77) 1910年のポナペ島の反乱では、事件発生から最初の救援隊(巡洋艦コルモラン)が駆けつけるまでに7週間かかっており、中国の港に駐留する巡洋艦ニュルンベルクやエムデンが到着したのは、さらにその数週間後のことであった。Gartzke, Willy, "Der Aufstand in Ponape und seine Niederwerfung durch S. M. Schiffe „Emden“, „Nürnberg“, „Cormoran“, „Planet“,“ in: *Marine-Rundschau*, 22 (1911), S. 705ff.
- (78) Christmann, Helmut/Hemenstall, Peter/Ballendorf, Dirk Anthony (Hrsg.), *Die Karolinen-Inseln in deutscher Zeit. Eine Kolonialgeschichtliche Fallstudie* (Münster/Hamburg, 1991), S. 56. Haberberger, Simon, *Kolonialismus und Kannibalismus. Fälle aus Deutsch-Neuguinea und Britisch-Neuguinea 1884-1914* (Wiesbaden, 2007). Krug, a. a. O., S. 56-70, 179-189.
- (79) 実際、ポナペ島の首長の言葉によれば、ドイツ人は以前の侵略者であるスペイン人と異なり、口先だけで何もできない存在と見られていた。Hambruch, Paul, *Ponape. I. Teilband* [Thilenius, G. (Hrsg.) *Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908-1910*, Bd. 7] (Hamburg, 1932), S. 300.
- (80) たとえば、第一次世界大戦前のサモアの白人社会では、およそ6割を占めるドイツ人のほか、英米を始めとするそれ以外の西洋人が4割居住しており、彼らは騒乱が頻発する島内の不穏な情勢に憂慮していた。*The Times*, Dec. 22. 1908, 38836, "Unrest in German Samoa," Mar. 15. 1909, 38907, "Unrest in Samoa," Apr. 15. 1909, 38934, "The Disturbances in Samoa." Hiery, Hermann Joseph, "Die deutsche Verwaltung Samoas 1900-1914," in: ders. (Hrsg.), a. a. O., S. 650.
- (81) 1913年中頃のアフリカ植民地におけるドイツ治安部隊の数は、東アフリカにドイツ兵410・アスカリ(現地人部隊)2,682, 南西アフリカにドイツ兵1,967, カメルーンにドイツ兵185・現地人部隊1,560, トーゴでは治安部隊ではなく約600名の警察隊が配置されていた。また、植民地のなかで唯一海軍省の管轄下にあった膠州湾には、2,000名を超えるドイツ軍人が駐留していた。一方、第一次世界大戦勃発前夜の南洋植民地は、ドイツ人将校2名、ドイツ人警察主任15名、現地人警察隊932名、サモアはドイツ人警察主任のもと、最大時でも50名程度の現地人警察隊によって守られているにすぎなかった。Haupt,

第一次世界大戦前のアジア・太平洋地域におけるドイツ海軍

Werner, *Die deutsche Schutztruppe 1889/1918. Auftrag und Geschichte* (Utting, [2001]), S. 35, 134, 139, 146. Hempenstall, Pacific, p. 23. Nuhn, a. a. O., S. 168-194.

(82) Krug, a. a. O., S. 434-444.

(83) Berghahn, Volker R., *Der Tirpitz-Plan. Genesis und Verfall einer innenpolitischen Krisenstrategie unter Wilhelm II.* (Düsseldorf, 1971).